

官立美術展覽會開設の急務

黒田清輝氏談

官設美術展覽會開設の事は我々の双手を擧げて賛成する所で、既に美術なるものがあつて之を奨励發達せしめざる可らざるものとすれば其機關の必要である事は云ふ迄もない、其規模の大小は姑らく問はずとも兎に角政府に於て美術展覽會を開設されたる曉には之に依つて奨励發達に對する一定の方針が確められて秩序ある進歩發展を見る事となるのは必然の結果であらうと思はれる

▲豪傑割據の時代

勿論我國には從來種々の展覽會が開設されたが其中の一展覽會に出品して賞牌を得た美術家が他の展覽會へ出品して必らず賞牌を得ると云ふ次第でもなく又出品審査に落第した美術家の作物でも世間では必らずしも排斥しない、必竟一展覽會で賞牌を得た美術家は自分一人位附けをされて豪えろいものとなつたと思つても世間一般では強ち然うとののみも認めないので、結局從來の展覽會は美術家の或部分の人々に位附けをする位の結果に止まつて、一般美術家の階級を定める機關とはなつて居らない、かやうな譯で美術界の現況は豪傑割據あひさまの状態あひさまで、謂はば切取り強盜を働いて漸く其名を維持して居るので、是等を以て海外の敵と戦ふのは到底不可能な事で、各國の世界博覽會へ我國から出品する美術品の價值が年々下つて行くのを見て其趨勢を推知する事が出来やう、所で今回の官設展覽會は是等の豪傑連を集め夫々階級を定め一團の軍隊を組織して歐米の強敵に當らすと云ふ趣旨に外な

らないと思はれる。

▲佛國サルンの價值

日本では美術の奨励發達を口にする人は決して少なくないが、其機關は斯の如く不完全なものであるのに、佛國では美術工藝の發達維持を奨励する事は日本では想像の出來ぬ程進歩したもので、佛國人自身は世界で許して居るより夫れ以上に自國のサルンを美術に對する最高最重の機關と心得て居るので美術家は勿論普通人でも我々畫家に對して先づ第一に口を開くのはサルンに出品したるや否やを尋ぬる事で、其場合に『否、出品したる事なし』と答へれば話掛けた人が如何なる種類の人であつても『それでは……』とさも輕蔑した態度で一切繪畫に關する談話を口にしなない、精々誰の弟子であるか、如何なる境遇にあるか杯尋ねる位に止るのであるが、之に反して一遍でもサルンに出した事があつたとすれば唯だ出したと云ふばかりで全然其人を大家遇ひにする、で自分が巴りに留學中同地の博覽會に自作の繪畫を出品して二等賞を得た時の如きは自分の師事して居つた人は、是は自分の弟子で此度博覽會で二等賞を得た日本の黒田であると得意氣に各大家に紹介して呉れた、之が日本の博覽會で受賞した場合であつたとすれば殆ど兒戯に類する事の様^{あた}に考へられるが佛國ではサルンは勿論博覽會杯も美術家の尊重すべき機關であると云ふ觀念が一般人士の頭腦^{あた}にあるので、自分が師事した人も勿論眞面目で諸大家に紹介してくれた次第なのである。(未完)

『中央新聞』明治三十九年二月二十九日